

式 辞

本日、このよき日に、御来賓の方々、保護者の皆様の御臨席を賜り、第八十回東大谷高等学校入学式を挙行できますことは、誠に大きな喜びです。入学を許可された 331 名の新入生の皆さん、入学おめでとうございます。教職員一同、心より歓迎いたします。そして、保護者の皆様、本日は誠にありがとうございます。改めてお祝いを申し上げます。

さて、本校は、一九〇九年に設立された大谷裁縫女学校を前身としており、校祖左藤了秀により、親鸞聖人の教えを建学の精神として設立されました。この親鸞という人物について、皆さんは中学校社会科の授業で、「鎌倉時代に親鸞は浄土真宗を開いた」と学んだはずですが、ただし、この皆さんが学んだ内容は、厳密に言うとは正しくありません。何が違うのかと言うと、親鸞は浄土真宗という宗派、つまり集団を立ち上げてはいないのです。

鎌倉時代、親鸞は、師匠の法然を深く尊敬していました。しかし、親鸞は自分に自信を持つことができません。「こんなに弱い私では」「こんなに愚かな私では」という思いが強かったのです。その結果、親鸞は、「こんな私が救われるには」をたった一人で考え抜くこととなりました。したがって、「親鸞は浄土真宗を開いた」ではなく、正しくは、「親鸞は自分の救いについて考え抜いた」なのです。このような親鸞が脚光を浴びるのは、それから二百年ほど過ぎた室町時代で、親鸞の子孫がその教えを紹介したところ、それが多くの人々に支持されました。これらの人々の集団が、後に浄土真宗とされるのです。

親鸞がたった一人で考えたことが、なぜ二百年後に多くの人々に支持されたのか。このことには二つの理由があります。一つは、親鸞が思い悩んだ「私」と、二百年後の人々における「私」が一致していたということです。つまり、親鸞の悩みは、多くの人々に共通の悩みであったということになります。そして、親鸞が二百年後の人々に支持されたもう一つの理由は、親鸞が考え抜いた内容が正しく言葉に残されていたということです。親鸞の言葉は、長い年月を経ても十分に理解可能だったのです。

さて、皆さんの高校生としての生活が本日から始まります。そこで、皆さんにまず実現してほしいことは、一人で考え、一人で行動できるようになることです。現代の学校生活では、「一人でいる」ことが敬遠され、時には馬鹿にされ、そのため、安易に他者とのつながりが求められる傾向があります。しかし、一人で考えること、行動することができる者どうしのつながりでなければ、何かを新たに創造するのは難しいのではないのでしょうか。高校入学という大きな環境の変化を迎える今こそ、皆さんには一人で考え、行動するというところにチャレンジしてほしいのです。

この一人で考え、行動するということは、決して孤独になることではありません。そのことは、先ほどの親鸞の話からも分かります。たった一人で考え抜いた親鸞が、時代を超えて共感を得た理由は二つありました。一つは、親鸞は「私」のことを考えながら、多くの人に共通する課題について考えていたこと、もう一つは、一人で考えたことを言葉に残していた

ことです。皆さんも、これらのことができれば、結果として、信頼し合える仲間が得られるはずです。

特に、「考えたことを言葉にする」ということについて、本校には実践の機会がたくさんあります。たとえば、宗教の授業において実施されている「感話」です。これは、一人一人の生徒が日常を振り返り、気づいたことを他の生徒の前で話すという活動です。休み時間や部活動中に、生徒たちが、それぞれのクラスで行われた感話を話題にしている様子などを見ると、個々の感話が他の共感を受けていること、一人の生徒による感話が人間関係の広がりにつながっていることが窺われます。このような本校の恵まれた環境を信じて、皆さんも前向きに、一人で考え、一人で行動することに取り組んでください。

そして、先ほども話したとおり、一人で考え、行動することができる生徒たちがつながったとき、大きな力が生まれ、新たな価値が創造されるはずです。考えたことを言葉にする機会が多い本校では、私が皆さんの前で話をする機会も多くあります。その度に皆さんの変化を確認し、三年後、皆さんが本校を旅立つ日には、皆さんの大いなる成果を振り返ることができることを強く願っています。

結びにあたり、保護者の皆さま、PTAの皆様の本校への御支援に深く感謝申し上げますとともに、今後とも変わらぬ御支援と御協力をいただけますよう、改めてお願い申し上げ、式辞といたします。

令和七年四月五日

東大谷高等学校長 吉永 雅也